



Title	「も」の語用論的考察
Author(s)	稲吉, 真子
Citation	研究論集, 15, 147(左)-159(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.1147
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60553
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_013_inayoshi.pdf



「も」の語用論的考察

稲 吉 真 子

要 旨

「も」の基本的な用法である「累加」とは、「同じカテゴリーに属するという判断（同一範疇判断）を示すこと」である。しかしながら、その用例を見てみると、同一範疇の判断がつきにくい、もしくは同一範疇のものが文脈上に存在しない場合も多くある。「も」の同一範疇を判断する基準としては、統語的同一範疇判断と語用的同一範疇判断があり、その内どちらかが必要となるが、語用的同一範疇判断についてはある種の推論を必要とすることが多いため、統語的同一範疇判断と比較し、同一範疇判断がつきにくいと言える。同一範疇判断がつきにくいかな否かについては、類命題の有無が大きく関与しており、それぞれの用例を類命題との関わりから考察する必要がある。

なお、類命題がないものに関しては、類命題以外にどのような同一性に基つき「も」を使用しているのかについて、新たな観点を導入して検討する必要があるが、それについては、「世界知識」という観点を導入し、話し手のもつ「世界知識」に基づき発話がなされているタイプとして分類することができる。

また、数量をとりたてる「も」についても、類命題がないタイプとして位置づけることができるが、これについては、「まで」、「しか（ない）」、「は」、などの、他のとりたて詞との対応関係から、「も」の特徴を明らかにしていく。

以上のように、本稿では、「も」の基本的な用法とそれ以外の用法について、統語論的観点から整理した上で、新たな観点を取り入れつつ、語用論的観点からの考察を試みる。

1. はじめに

日本語の「も」は従来、副助詞や係助詞に分類されるのが一般的であったが、宮田（1948：178）においてそれらが「取り立て助詞」として一つに統合されたのをきっかけに、以降は「とりたて詞」¹という区分で論じられることが多くなった²。

宮田（1948：178）では、とりたて詞を、「文または句の一部を特に取り立てて、その部分をそれぞれの特別の意味において強調する助詞である」と定義しているが、定義については研究者により若干異なりがある。それにともない、どの助詞をとりたて詞とするのかにも若干の違いがあるが、おおよそ、「は」、「も」、「だけ」、「のみ」、「しか」、「ばかり」、「こそ」、「さえ」、「すら」、「でも」、「だって」、「まで」、「など」、「なぞ」、「なんぞ」、「なんか」、「なんて」、「くらい」、がそれに該当する。

また、とりたて詞の研究自体も、宮田以降 1970 年代頃から、鈴木（1972）や奥津（1974）の研究を皮切りに徐々に注目が集まってきた。以後、記述文法においては、寺村（1991）、沼田・徐（1995）、沼田（2000, 2009）、澤田（2007）、日本語記述文法研究会（2009）、などを中心に活発に研究がなされてきたが、話し手の発話状況、聞き手への情報伝達の効果など、語用論的観点からの考察は未だ数少なく、検討の余地がある。

例えば、「も」の基本的な用法は、以下の(1)のように、「同類の物事を累加すること」であるが、(2)のように、累加する物事に対する他者が具体的でない場合にも、「も」は使用される。

- (1) 次郎が来た。太郎も来た。
- (2) その日は天気も良かったので、公園は賑わっていた。
- (3) 君もしつこいな。
- (4) a. 1000 円もある。
b. 1000 円もない。

また、(3)に関しては、「君」に対し、誰か他に「しつこい人物」が存在するわけではない。もちろん、前の文脈³に他に「しつこい人物」が存在し、その人物に《累加する》という意味でも取れるが、特にそのような類命題が存在しない場合でも使用は認められる。

¹ 研究者によっては「とりたて助詞」、「取り立て詞」という用語を用いる場合もあるが、特に概念的差異はないようである。本稿では最も広く用いられている「とりたて詞」という用語を使用する。

² 現代においても「とりたて詞」という区分を立てず、従来通り「副助詞」として扱う場合もある。

³ ここでの「文脈」とは、加藤（2009）に従い、同一セッション内部で言語形式を用いて情報化された発話の蓄積を指す。加藤（2009）では、他の文脈と区別し、「形式文脈」とされている。

(3)では、類命題の有無という観点以外に、「君」に対する話し手の何らかの《評価の付与》という機能が関与している。このように話し手の評価を「も」が表わしている場合には、類命題がなくとも「も」の使用が認められるのである。このような例に関しては、同一範疇判断という基本的な用法の説明以外に、新たな観点を導入した説明が必要となる。

なお、(4)のように数量をとりたてる際の「も」も同様に、話し手の評価が関与しているものである。これらについては、他に数量をとりたてる「まで」、「しか（ない）」、「は」、などとの比較から「も」の特徴を明らかにしたい。

以上のような諸問題について、本稿では統語論的な整理を踏まえた上で、語用論的な観点からの考察を試みる。まず第2節においては、先行研究をもとに、統語的な分類について整理を行う。それを踏まえた上で、「類命題の有無」、「世界知識」という2つの観点をもとに語用的な整理を行う。その後第3節においては、同じく類命題がないタイプとして、数量の「も」について整理する。第4節においては、第3節の数量の「も」の際に見られる、話し手の評価を付与するという「も」のもつ機能について、Levinson (2000) の尺度推意を用いて考察する。以上のような構成で「も」の語用論的な考察を試みる。

2. 「も」の分類と用法

2.1 「も」の分類

研究者によって分類や内容に関して差異が見られるものの、先行研究では、おおよそ以下のように、3つの用法に分類するのが最も一般的な方法である。

累加：文中のある要素をとりたて、同類のほかのものにその要素を加えるという意味を表わす

極限：文中のある要素をとりたて、同類のものの中でそれが極端な例であることを示すとともに、ほかのものは当然そうであるという意味を表わす

ほかし：文中のある要素をとりたて、同類のものがほかにあることを漠然と示すことにより、文全体をやわらげる

(日本語記述文法研究会 (2009) : 5-7)

- (5) 太郎も学校に来た。
- (6) 親も愛想を尽かした。
- (7) 秋も深まってきた。

(5)のような累加の「も」は、「太郎以外の誰かが学校に来た」という事実がなければ成立し

ない。つまり、この種の既存の知識を有していることが前提となるが、これについては話し手と聞き手が発話時に完全に共有しているとは限らない。例えば聞き手が既存の前提を知らない状態で(5)を聞いたとすれば、「太郎以外に学校に来た人物がいる」という前提が成り立つことを推論し、時系列にさかのぼって知ることになる。このように、累加の「も」は通常、文脈の前後いずれかに、それに関わる何らかの情報を有している。

以上のように、「も」の基本的な用法である「累加」についてまとめると、「同じカテゴリーに属するという判断（同一範疇判断）を示すこと」となる。「累加」という言葉からは、話し手と聞き手との間で共有されている前提がすでにあり、それに何かを《加える》という意味に思われがちであるが、必ずしもそうとは限らないのである。「極限」と「ほかし」の例はそれぞれ(6)や(7)のようなものである。

なお、同一範疇として判断する際には、とりたて詞が接続するものが焦点（focus）となり、それに対応する同一範疇のものを他者として判断するのが基本である。

(8) 太郎もビールを飲んだ。

(9) 太郎がビールも飲んだ。

(10) 太郎がビールを飲みもした。

例えば(8)の場合、「Xがビールを飲んだ」という、「太郎」と同じカテゴリーに属すると見なされる太郎以外のXが既存であることが前提となるが、(9)の場合は「ビール」がXとなり、「ビール」と同じカテゴリーに属すると見なされるものがXに入り得ると想定される。(10)の「飲む」も論理は同様である。つまり、同一範疇として判断するためには、品詞の一致が基本であり、統語構造の影響を強く受けていることが分かる。

しかし、同一範疇として判断するために、必ずしも品詞の一致が必要であるとも限らない。

(11) A：「昨日のテストの出来はどうだったの？」

B：「うーん。予想していた問題が全く出なかった。それに時間も足りなかったよ。」

(11)では「時間」の他に何か足りなかったものがあるわけではなく、「予想していた問題が全く出なかったこと」と、「時間が足りなかったこと」の2つの事柄に「テストの出来」に対する「良くない事態」としての共通性が見いだされており、同一範疇として判断することができる。

また、(11)では名詞「時間」に接続している「も」は、「時間」だけをとりたてるものではなく、命題全体にかかるものである。そのような場合、「時間の他に何か足りなかったものがある」という解釈ではなく、「時間が足りなかったこともあり」というように解釈される方が自然となる。このような構造の変化を「位置の繰り上がり」と言い、(11)のように日常会話などによく

見られる現象である。

しかしこのような共通性すらなく、そもそも何をもとに同一範疇だと判断しているのかが文脈に現れておらず、その判断が極めて分かりにくいこともある。

(12) いよいよ秋も深まって参りました。

(13) 君もしつこいな。

(12)では、文脈上から秋の他に何か深まってきたものがあるとは考えにくい。また先に見た(11)のように、「秋が深まってきた」という命題に対し、共通性を見いだすことのできるものの存在も不明瞭である。

ここでの「も」は、その発話により、「秋の他にも深まるものがある」、「世の中には色々な変化や季節の移ろいなどがある」といったような認識を前提化させる機能を担っている。これにより、唐突さを回避する効果や、周囲に配慮しているような印象を与える効果が得られることから、挨拶の導入部などで用いられることが多く、ほぼ慣用句のような働きを担っているものも多い。この他には「宴もたけなわになって参りました。」、「夜も更けてきた。」、のような例が挙げられる。

しかし類命題がないタイプの中には、(13)のように、そのような機能がないものもある。これは「世界知識」に基づき「も」が使用されているタイプである。

加藤（2009：208）によると、世界知識とは、「セッションが始まる前から存在している記憶で、いわば世界に関する知識の総体」とされている。世界知識は個人個人がもつ知識の総称であり、どのような知識を有しているかについては個人ごとに差がある。個人差があるとはいえ、その中には多くの人間により共有され、常識的な知識になっているものもあれば、ごく限られた共同体しか共有されておらず、一般性の低いものもある。

先の例に戻ると、(13)では、話し手の世界知識の中に「世の中にはしつこい性格の者がいる」といった知識があり、そして「今現在君もそのような者たちと同様の性格になっている」という事実を、その知識に参照させて「も」を使用している。

(13)のような例文の場合、話し手が予めもっていた「君」に対する印象が、「しつこい」とは逆であり、それに反する事態を知覚した場合に「も」が使用される場合や、「君」のことをしつこい人物であると思っていながらも「そうは思っていなかったのに」という落胆や苛立ちを聞き手に伝えるための、一種の伝達上のストラテジーとして用いられる場合などが考えられる。

「も」の使用においては、一般的に、統語的、もしくは語用的同一範疇判断がなければ同一範疇判断はつかないが、世界知識に基づき発話されているこのような「も」は、語用的同一範疇判断の中でも、「類命題がないタイプ」として位置づけることができる。

2.2 まとめ

2.1節で見たように、「も」は先行研究においては、意味ごとに大きく3つに分類されているのだが、基本的な累加の用法と、それぞれの用法との関係についてはあまり詳しく述べられてはいなかった。累加するものが明確でないにも関わらず、「も」が用いられている用例は一見すると「も」の基本的な機能と矛盾しているようにも思えるが、どのような共通点、もしくは相違点があるのかについて、「同一範疇判断」、「類命題」という観点から、以下にまとめる。

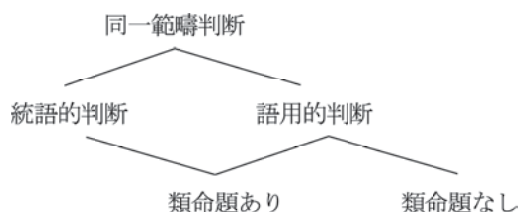


図1:「も」の同一範疇判断についてのまとめ

- 統語的なもの： (1) 次郎が来た。太郎も来た。 (再掲)
- 語用的なもの： ①類命題あり：(2) その日は天気も良かったので、公園は賑わっていた。 (再掲)
- ②類命題なし：(3) 君もしつこいな。 (再掲)

なお、同一範疇判断が語用的なものによる場合、聞き手はその同一判断を下すために、何らかの推論を行わなければならない場合が多い。

3. 数量の「も」

3.1 数量の「も」の統語的制約

前節まででは、2つの同一範疇判断、類命題の有無という観点から「も」を考察した。第3節においては(4)に挙げたような、数量に関与する「も」について考察していく。

そこで、数量の「も」について述べる前に、まずは日本語の数量詞に関する特徴について整理する。日本語では数量詞に関する制約が他の諸言語の比べ厳しく、それにより数量詞の使用にやや不自然さを感じる例がある。

- (14) a. # 私は3台の車を持っています。
b. 私は車を3台持っています。

数量詞は(14a)のように、「数量詞+「の」+名詞」の形で連体修飾を行う連体数量詞と、(14b)のように、格助詞を伴わずに名詞単独で副詞のようにふるまう連用数量詞に分けることができる。

(14a)と(14b)を比較すると、(14a)の方が不自然な日本語となる。日本語の場合、数量詞を作用域(scope)に入れるためには、数量詞に直接動詞を接続させなければならない。本来(14a)のように、連体数量詞で接続している名詞と数量詞が切り離され、(14b)のような連用数量詞になることを数量詞遊離(quantifier floating)という。

世界の言語で見ると、英語の“I have three cars.”のように、連体数量詞の構造をとるものが圧倒的大多数で、そもそも連用数量詞の方は存在しないという言語も多い。しかし日本語の場合はむしろ逆で、連用数量詞が無標で、連体数量詞は有標となる。(14a)のように、有標である連体数量詞をあえて使用する場合には、「私は3台の車を持っています。その車は全て私が30代の頃に買ったもので……」というように、それについて何らかの説明が付加されなければ不自然となる。以上のような規則は、以下で論じるとりたての数量詞の際にも当てはまるものである。

3.2 肯定文における数量の「も」

3.2.1 基本的な機能

まずは数量の「も」の用法について整理する。

(15) 5人も来た。

ここでの「5」という数字は、「来た人」の集合の中で最も多い数量に当たるため、成立の可能性は最も低くなる。この最も可能性が低い命題が成立することにより、《意外》という意味が生じる。したがってこの場合、「6人」は真として認められない。また、聞き手に対しては、話し手が基準に照らして《多い》という評価を持っていたことをパラ的に伝達することになる。

- (16) a. ああ見えて、次郎には子どもがいる。孫もいる。
b. ?? ああ見えて、次郎には孫がいる。子どももいる。

数量の「も」以外にも、(16)のような《意外》を表わす「も」の場合、(16b)のように、「も」がとりたてているものより想定しにくいものが先に出現すると、同様に不自然になる。上述の(15)が「5人も来た」が真であれば、「4人来た」は真であるのと同様に、一般的に考えて「孫がいる」ということは「子どもがいる」ことを含意(entail)するためである。このように、累加の用法には意味論的な制約があることが分かる。

3.2.2 その他の数量に接続するとりたて詞との比較

数量に接続するとりたて詞は他にもあるが、その用法にはそれぞれ特徴がある。以下においては、それらと「も」を比較することにより、「も」の用法を特徴づけたい。

(17) 成績優秀な美佳まで補習に来た。

(18) 成績優秀な美佳も補習に来た。

①「まで」

(17)の「まで」は、「来そうな人」という話し手のもつ見込みの序列において、「美佳」が下位に位置しているという《度合いの限界》を示す。話し手が「まで」を用いることにより、聞き手はその対象が話し手の度合いの中で、下位に位置しているということを推論する。

なお、(18)のように、《意外》を表わす「も」と「まで」はほぼ同義としてパラフレーズできる。

②「しか(ない)」

「しか」は「ない」などの否定の要素を含む述部と照応させて用いられる。「しか(ない)」は「だけ」と同様の意味を表わすが、「だけ」はそれを越えずに、それに限定されているという《限界表現》であるのに対し、「しか(ない)」はそれを越える事柄が否定されることに重きがあり、期待や予測よりも《少ない》という、話し手の評価の付与が強く関与する。これは(15)のような、話し手の《多い》という評価をパラ的に伝達する「も」と対立をなす。

(19) 会議には4人だけ出席した。

(20) 会議には4人しか出席しなかった。

また、同じような場面で使用できる「だけ」と比較すると、(19)では「4人を越えない人数が出席した」という客観的事実しか伝達されないが、(20)では出席者は4人にとどまり、出席すべきなのにしなかった者がいるという話し手の否定的な態度が、「4人の出席者では《少ない》」という話し手の評価を通じ、表わされていることが分かる。

3.3 否定文における数量の「も」

3.3.1 基本的な用法

次に否定文における数量の「も」についてまとめる。「も」の場合は、否定との共起が肯定文と対をなさない場合がある。

(21) パーティーには 100 人も来なかった。

解釈(1)

来た人が 100 人より少ない $\neg > 100$

①来客者はたったの 100 人も来なかった。70 人しか来なかったので料理がたくさん余ってしまった。

②A：100 人も？そんなにたくさんあのパーティーに来たの？

B：いや、100 人も来なかったよ。80 人くらいじゃなかったかな。

解釈(2)

来なかった人が 100 人いる $100 > \neg$

招待状を配った 700 人の内 100 人も来なかった。

このように、(21)の否定を含む「100 人」という人数は、多いとも少ないとも解釈されうる。この解釈の違いは、作用域がどこまで及ぶかにより生じるものであるが、話し言葉においては音調の違いも関与している。

3.3.2 その他の数量に接続するとりたて詞との比較

①「は」

否定文では《最大限》を表わす「も」と、肯定文では《最低限》を表わす「は」の用法と対をなす。

(22) a. 一部屋に 10 人も入れない。

b. 一部屋に 10 人は入れる。

「は」の基本的な機能は主題の提示である。主題の提示の場合は、対比される別の主題を想定せず話題として言及したい要素をとりたてるが、対比される要素が想定さえされれば、対比の用法として機能する。

(23) 日本酒は飲むが、ワインは飲まない。

(24) 3000 円はかかる。

(25) 20 人は来ない。

(23)では「日本酒」と「ワイン」が「飲むもの」と、「飲まないもの」という対比をなしているが、対比される特定のものが想定されるのではなく、X と X 以外という対比になれば《限定》

の意味になる。

数量に「は」がつく時は「その数量」と「その数量以下」という対比から《限定》の意味になり、《最低限度》と解釈される。

なお、(24)のように、肯定文の「は」の場合は、(15)のような「も」と同様に、「3000 円」が真であれば、含意されているそれ以下の値も真になる。しかし「3000 円はかかる」ということは、「少なくとも 3000 円はかかる」というだけであって、「も」とは異なり、それ以上の値に関しては、真であるとも偽であるとも言及しない。そのため「3000 円はかかる」という文だけではそれ以上の値に対する真偽判断はつかない。

(25)のような否定文の場合、「20 人」が限度となり、「20 人以上」については否定される。つまり(25)の場合、20 人以上の人数が来ることはない。来るのは最大限でも 19 人という解釈である。

3.4 まとめ

以上に見てきたように、「も」は「5 人も来た」のように、期待や予測よりも《多い》という話し手の評価を前提にして用いられ、《少ない》という話し手の評価の付与する「しか(ない)」と対立をなす。肯定の「は」は「3000 円はかかる」のように《限定》や《最低限》の意味として用いられるが、それ以上の値についての真偽判断がつかない点が、肯定の「も」と異なる点である。

このような、数量の「も」も、類命題がないタイプである。つまり、発話の命題や語用的な命題が文脈としてなくても良いので、文脈の前後関係を考慮せずに発話することができる。尺度性を通し、話し手の評価を聞き手に与えているだけなのである。このように、尺度に関わりとりたて詞は、話し手の評価と深く関与していることが分かる。その例として以下の(26)を参照したい。

(26) 娘：「来月から少しお小遣い増やしてくれないかな？」

母：「分かったわ。じゃあ 50 円増やすわね。」

娘：「え？50 円しか増やしてくれないの？」

母：「50 円も増やしてあげるんじゃないの。」

上記の会話で、娘の「50 円しか増やしてくれないの？」という発話では、「50 円」という値に対し、《少ない》という話し手の評価が付与されており、対する母の「50 円も増やしてあげるんじゃないの。」という発話では、「50 円」という値に対し、《多い》という話し手の評価が付与されている。

このような話し手の評価を付与する「も」は、類命題が必須とはならず、なくても不自然に

はならないのである。

4. 数量をとりたてる「も」と尺度推意

「も」が話し手の評価に深く関わるというのは前述の通りであるが、聞き手としては話し手が何を意図しているのかを推論する必要性が出てくる。それについて、以下で尺度推意 (scalar implicature) という観点から考察する。

4.1 尺度推意

尺度推意については Levinson (2000) の記述を用いて説明する。Levinson は新グライス派の学者の一人であり、基本的にはグライスの考えを継承し、そこに自らの新たな考えを加えるといった形式をとっている。

Levinson (2000) は、Grice (1989) の提示した「量の格率 (Maxims of Quantity)」、
「質の格率 (Maxims of Quality)」
「関係性の格率 (Maxims of Relation)」
「方法の格率 (Maxims of Manner)」の 4 つの会話の協調原理を、発話の表層的な要素と情報性の要素から検討し直し、Q 原理 (Q-Principle)、M 原理 (M-Principle)、I 原理 (I-Principle) という 3 つの原理を提示した。この内の Q 原理から導き出される Q 推意 (Q-Implicature) には、大きく分けて「尺度の Q 推意 (Scalar Q-Implicature)」
「節の Q 推意 (Clausal Q-Implicature)」
「代替形の Q 推意 (Alternate Q-Implicature)」の 3 種があるが、今回用いるのは Q 推意の代表例の一つである、尺度推意である。以下に尺度推意の例を挙げる。

(27) A : “What time is it?”

B : “Some of the guests are already leaving.”

PCI : It must be late.

GCI : Not all of the guests are already leaving.

(Levinson 2000 : 16)

(27) の会話からは、2 つの推意を得ることができる。一つは一般会話推意 (Generalized Conversational Implicature : GCI) で、もう一つは特殊会話推意 (Particularized Conversational Implicature : PCI) である。GCI は、“some” と発話した時に生じる ‘not all’ に当たり、これは特定の語彙の使用によって生じる普遍的なものである。そのため基本的に個人差はない。一方、PCI は、“Some of the guests are already leaving.” から導き出される ‘It must be late.’ のようなもので、個人により差があったり、アドホックであったりするものである。

(28) 花子も泣いた映画。

つまり、(28)の場合、以下のような GCI と PCI が得られる。

GCI：花子の他に泣いた人物がいる。

PCI：それほどまでにその映画は感動的であった。

先の(26)の例もそうである。娘の「え？50円しか増やしてくれないの？」という発話では、「50円という値は少ない」という娘の評価とともに、「もう少し増やしてくれてもいいのに、やはり母は厳しい人だ」などといったような非難の思いも PCI として伝達されうる。一方母の「50円も増やしてあげるんじゃないの。」からは、「50円という値は多い」という母の評価と共に、「今のあなたにはそれ以上は必要ないだろう」や「頼んでいる立場でありながらおこがましい」などといった PCI が得られうる。

5. まとめ

以上のように、形態的には一つの「も」であっても、「同一範疇判断」という基本的な用法を中心に、それらには下位分類があること、またその周囲には様々な機能があることを本稿では明らかにした。

一見すると同一範疇判断がつきにくいような用例にも何らかの規則があり、それに基づいて「も」は使用されるのである。

6. 今後の課題

本稿においては「も」の統語論的整理と語用論的考察にとどまったが、「も」を用いることで生じる効果についての検討は今後の課題としたい。

沼田(2000)や日本語文法記述研究会(2009)では、本稿において、類命題が想定しにくいタイプとしたような用例について、「やわらげ」の機能があると指摘されているが、それは(29)や(30)のような挨拶の冒頭などで用いられる、ほぼ慣用句化したような表現に多く見られるものである。先述の通り、そのような表現に関しては、確かに話し手の認識を前提化させる機能があり、これにより唐突さを回避する効果や、周囲に配慮している印象を与えるなどの効果が得られる。

しかしそれ以外にも日本語母語話者は(31)や(32)のように、比較的日常生活の中でも、推論が必要である語用論的な「も」を使用する傾向がある。このような例では「は」や「が」では

なく「も」が用いられやすい傾向があるが、それによりどのような効果が得られるのかについては、今後、話し手と聞き手、双方の立場から考察していきたい。

- (29) 宴もたけなわになって参りました。
- (30) 秋も深まってきました。
- (31) 時間も遅いから、今日は帰ろうか。
- (32) 塩加減もちょうどいいし、とても美味しいよ。

(いなよし まこ・言語文学専攻)

参考文献

- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館
- 加藤重広 (2009) 「動的文脈論再考」『北海道大学文学研究科紀要』 128 号 pp.195-223
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』 くろしお出版
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房
- 寺村秀夫 (1991) 『日本語のシンタクスと意味第Ⅲ巻』 くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 5』 くろしお出版
- 沼田善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」益岡隆志・野田尚史・沼田善子 (編) 『日本語の主語と取り立て』 pp.175-207 くろしお出版
- 沼田善子 (2000) 「とりたて」仁田義雄・益岡隆志 (編) 『時・否定と取り立て』 pp.154-212 岩波書店
- (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房
- 宮田幸一 (1948) 『日本語文法の輪郭』 pp.178-192 三省堂
- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Levinson, Stephen C. (2000) *Presumptive meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass.: The MIT Press. [田中廣明・五十嵐海理 (訳) (2007) 『意味の推定：新グライス派の語用論』 研究社]